
~ソロモン~ 動物の声が分かる男

伊之口浩作

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「ソロモン」 動物の声が分かる男

【Zコード】

N1942A

【作者名】

伊之口浩作

【あらすじ】

俺の名は松本。ごく普通の男だが、特異希な能力を持つ。それは「ソロモン」。俺には動物の声が聞けるのだ。

第一話 ゴールデンレトリバー ジヨン 四歳（前書き）

一気に書き上げた作品です。

結構駄作です。

面白いと思ったら、評価と感想の方、よろしくお願ひします>

第一話 ゴールデンレトリバー ジヨン 四歳

俺は公園のベンチで本を読んでいた。本といつても、重苦しいタイトルの本ではない、ただのマンガ雑誌だ。今日発売で今し方買ったものだ。

マンガが一区切りつき、ふと顔を上げた。すると、目の前に若い男女数人と、赤い首輪の「ゴールデンレトリバー」がいた。

しまった。と、おれは思った。何故なら俺は、目の前に動物が居ると、その動物の声が聞こえてくる。しかもその間、他の声は全く聞こえない、いや、そのほかの感覚全てが消え去る。

まずい。そう思い、手にしたマンガを放り出し、ベンチから立ち上がつて逃げ出そうとした。しかし、俺の奇妙な能力は、俺が走り出す前に、その本性を露わにした。

フツ。今日は我が主との散歩か。

それにもしても、今日はいい天気だ。心なしか、我が主も楽しそうだ。

ん。「お座り」とな。フツ。この私にしてみれば極簡単なことだ。ほれ、こうすれば良からう。

なんだ? 「そのまま、待て」とな。いいだろ、我が主が何を成すかは知らぬが、私はその命令に従うのみだ。

ん? なにをしている……? おお! それは私の大好物のビーフジャーキーじゃないか!

なるほどどうか、分かったぞ、我が主の命令の真意が!

我が主は、私の目の前でビーフジャーキーをちらつかせ、私がどれくらい耐えられるかを試すおつもりだな。

いいだろう。我が屈強な精神! 必ずや主の「期待に添えましょうぞ!

ん? 今日はいつもと様子が違うな。私の鼻の上にビーフジャーキー

キーを……。おい、何をするのだ？一枚、一枚、三枚とビーフジヤーキーを私の鼻の上に……。

主のしていることがさっぱり分からん。

ん？ おお、それは主の言葉で言う「びでおてーふ」なるものだ。先日、私の芸の内容を録画しようと、それを使ったことは今でも鮮明に覚えている。

お。鼻の上のジャーキーが四枚、五枚、六枚。段々増えている。それにしても、ジャーキーの放つ香りはとてもかぐわしい。主の隣の妙な髪の色の女よりも良い香りだ。

ん？ こんどは、五枚一気に乗ってきたぞ。

はあ。一体どのくらいまで待つていればいいのだ？朝から何も食べていながら、益々食べたくなってきたぞ。今すぐにでも、ジャーキーで腹を満たしたい。

ん？ いつの間にかジャーキーが十六枚に……。

はあ。腹が減った。早く食べたい。これは、一種の拷問か。何故そんな事をする。これまで、私は主の命令に従い続けてきたではないか！ 流石に、初めてあつた日は主の存在に恐れを成し、噛みついたり飛びかかつたりしたが、それでも今では従順しているではないか！ その行いになんの意味がある。

はつ、そうか、わかった。我が主は『人間』だ。『人間』は我ら『犬』よりも遙かに高等で思慮深い生き物。ははは。私はどれほど下等で下らない問題に悩まされていたのだ。人間のすることは、我ら犬のすることよりも遙かに意味のある行い！ それを私が完全に理解出来るものか！ 私は主の命令に従つていればいいのだ。主の命令に疑問を抱くなんて、私は犬失格だな。

それにしても、私の鼻の上がずいぶん重たくなってきた。

ん。主が何か言っている。

「三十枚突破！」

三十枚？ ああ、ジャーキーのことだな。いやしかし驚いたな。この世にこんなに沢山のジャーキーがあるとは。

む！？ しまつた！ よだれが！ ますい。主の前でこんな醜態を晒すとは！

止めねば！ このよだれ
うな真似だけはつつつつ！

あああ、止まらない。何故だ、何故止まらない！　この香しいジ
ヤーキーの香りのせいだな。ならば、このジャーキーをここから排
除してしまえば……。

ダメだ！ そんな事は許されない。 主の命令は絶対だ。 待ち続けなければ！

ああ！ 腹が！ 今、腹が鳴つた！ 腹の空いている証拠だ！
ああ、ジャーキーが欲しい。今すぐにでも食べたい。私の腹が鳴
つて懇願している！

主！早くその命令を解除してくれ！
私はこれまでアナタに従順だった。これからもそのつもりだ！

頼む！ 早く食べさせてくれ！ ゲラゲラ笑つてないで早く！ 食べさせてくれたら、この先何でもする！ 「お座り」 も「伏せ」 も、「ちんちん」 だつてやつてみせる！ だから早く！

「おわつ！ 崩れた！」

今だ！ 今しかない！ 主！ 濟まないが、ジャーキーは食べさせて貰う！ お叱りは覚悟している！ だが！ それは食べ終わつた後にしてくれ！

! ! ! !

ガツガツ！
バクバク！
むしゃむしゃ！

ヨリニ！ ヨリニ！ ヨリナガルゾ！

「ジヤーキー、まだ死んでないのか？」

ぐ。またか。またも動物の声を聞いていたよつだ。
どうやら、田の前のレトリバーのようだ。

ふう、しかし。あの飼い主は自分の犬の姿を撮つてじつするつも
りなのか。ああ、そうか。先週の「ぽちたま」で、ペットのおもし
ろビデオ募集とかいう企画をやつていたな。あれに応募するつもり
だな。

まあ、いいや。俺は明日からも、いつもと変わらぬ毎日を過ぐす
だけ……。

第一話 ゴールデンレトリバー ジヨン

四歳（後書き）

このお話を。まだまだ続きます。

第一話 二毛猫 野良
一歳（前書き）

動物の声が聞こえたら、 分こんなこと言つてるんですかね？

第一話 二毛猫 野良 一歳

公園での一件には参った。

ベンチの側だったのがせめてもの救いだ。意識を失った直後、自分の真後ろに有つたベンチに倒れたお陰で怪しまれずに済んだ。あの公園には寝てるサラリーマンが多いからだ。

さて、急がなくては。これから友人の家に行かなくては。

友人の家に行くには商店街を通りていくのが手っ取り早い。

あと数十メートルほどだな。

ん？ あれは。しまった、路地の影に猫が！
くそ。このままでは。

松本の能力は、松本の意識を消し去り、その本性を現した。

へつへ。今日の獲物は鰯だな。「魚本」は青魚が旨い。

ああ、でも、一尾2500円の真鯛も捨てがたい。鯛好きなんだよなあ。

う～む、悩むなあ。鯛にしようか、鰯にすべきか。

くそつ。あの店主め、なかなか頭がキレると見た。チクショウ、鰯と鯛を一目で確認出来るポジションに立つていやがる。どっちかを盗みに行つたとしても、確實に見付かる。しかも、あの店主はあのポジションを死守していやがる。密は全部嫁に任せて、あそこからほとんど動かないときたもんだ。

え～い、舐めやがって。
ん。電話。ちつ、嫁が出た。

いや、これはチャンスだ。こつなつてしまえば店主が店番をせざるを得ない。ふふ、貰つたぞ。

「はいはい、アサリですね」

動いた、今だ！

「500円です」

貰つたああ！

「毎度！」

行ける！

「ああ～。猫ちゃんだあ！ かわいい

何！ 子供！

しまつた、これは計算外だ。まずい抱き上げられた、身動きがとれん。

「ママ～、見てみて」

くそ、放せ。くそ、店主があのポジションに。「あらあら。まみちゃんはなしてあげまじょつね」

そうだ、今すぐそうしろ！

ああ、嫁が帰つて来やがつた。これでは盗めない。くそ。放せ。

「痛いー」

許せ、軽く引っ搔いただけだから深くはない。一週間で治る。それよりも鯛だ。

「大丈夫？」

よし！ 嫁が女の子に近付いたぞ。これで店の守りは手薄だ。今しかない。

店主め、俺に気付いたな！ 仕方有るまい、店の前で騒ぎを起したのだからな。しかし、気付いたからどうだといつのだ、俺は行くぞ！

「あつ。このやう

ふはははは。遅い遅い遅ーい！ この鯛は俺の物だ。

ん？ 後ろから他の猫の群が……？ はつ、アイツ等俺を囮にして。俺は踊らされていたのか。

「捕まえたぞ、この泥棒猫め！」

しまつた！ 捕まつた！ 放せ！ オイ！

「ああ、仲間がいたのか！」のむ、ゆるせんせー！
待て！ 違う！ アレは俺とは関係ない！
や、やめりやおおおおお！

はっ。またか。また、動物の声が聞こえた。
うつ、俺の周りに人だかりが。まずい、今すぐここから立ち去る
う。

しかし、この力にも困ったものだ。

第一話 二毛猫 野良 一歳（後書き）

この動物について書いて欲しいーーとこつ要望があったら、メッセージを下さい。

第三話 手乗り文鳥 ルッチ 四ヶ月（前書き）

この話を書くのが楽しくなってきました。
まじで筆が進むんですよ。

第三話 手乗り文鳥 ピッチ

四ヶ月

いやしかし、商店街の一件には参った。多くの通行人に見られてしまつたからだ。危うく、警察に職質（職務質問）をうける所だった。

さて、商店街から徒歩十分。『ハイム小泉』が俺の友人の家だ。

「俺だ。松本だ」

「おお、まつちゃん。入りな」

友人の名は谷本。高校からの友人だ。

それにしても、相変わらず汚い部屋だ。

「今、お茶を入れるよ」

「すまない」

俺は谷本の部屋の中を見渡した。それにしても汚い。なんだかきな臭い。

一間の部屋には家財道具一式が置かれていた。テレビ、タンス、ベッド、パソコン、鳥かご……。

鳥かごだと。まずい。これでは俺の奇妙な力が。

「谷本！ お前、いつの間にこんな鳥かごを……。前来たときは無かつただろう！」

俺の語氣は自然と強くなつていた。

谷本はそんな俺に少し驚いたようだ。振り返るなり固まつてしまつていて。

「いや、それは、一週間前に……」

「何を飼つてる。言え！」

「て、手乗り文鳥」

くそ、早くここから逃げなくては。

「まつちゃん。何処行くんだよ」

気のせいいか？ 谷本の声が震む。

しまつた！ またあの力が！？

「ぱぱ。『ぼくの妹が『ぱぱ』だつて。』
ははは、かわいこねまへ。

それにして、ぼくのかこぬしのおともだちのお兄ちゃん、なんだか、ぼくのおひきをみるなりおひきがやつた。ぼく、なにかわるいことしたかなあ？ それにつぶせたおれちやつた。ぼくのせいかなあ？

まあ、いいや。やんなことよつ、『ほんぐ』はん。

ああつ、まだ……。

ぼくのかこぬしのお兄ちゃん、こつつむ『ほん』のカラを取つてくれてない……。これがあるとほんのに……。ぼくのひとせりこのの……？

まあ、いいや。『ほん』がならお水のも。

わやあ、なにこれ。お水くさい！ なんでまことかえてくれないの……？ こんなお水のんだらおなかこわしきやつよ……。ぼくのひとせりこのの……？

せりわれたくないなあ。はじめてあつたときは『かわいい』って言つてくれたのに……。あれはウソだったの……？

ぼくのおうち、なんだかきたないなあ……。あつちひひかのぼくのつんちがおひこひてる。たまにでいいからおそうじしてほし。おにこちゃんのおへやもきたないなあ。おにこちゃんの『ほん』のたべかすがいつぱにそのまんまになつて、ちつちやこ虫がわいてる……。こんなおへやにいたらびょうきになつちやうふ。

おにこちゃん、おともだちのおにこちゃんの妹まえをよんでもる。おの兄ちゃんんだいじょうぶかなあ？ ぼくのせいだつたらびうふ。みづ……。お兄ちゃん、だいじょうぶ？

「おつちやん。おこ。おつちやんー。」

ん。谷本が俺の事を……。

しまつた。またあの力が現れたらじご。

「大丈夫かよ？ いきなり倒れて」

くそ。この力、ハツキリ言つて迷惑そのものだ。動物が近くにいると、すぐに目覚めてしまう。やつかいだ。

それにしても。この男、文鳥の世話ををしてなにようだな。あのきな臭さはそのせいか。ここは一つ、あの文鳥の為にも一つ注意してやらなければ。

「谷本！ お前、文鳥の世話をしてるのか！ 可哀想だろ！」

「あつ、そういうやあ、ここはのところ忙しくてあまりやつてなかつた。すまん」

谷本め、俺に言われて鳥かごの掃除を始めたな。これでは、飼い主失格……だ……。

おともだちのお兄ちゃん。ありがとう。

またか。しかし、今回は短かつたな。
まあいいか。とりあえず、一つの小さな命を救えたのだから。
ふふ、今日は良いことをした。

第三話 手乗り文鳥 ペッチ 四ヶ月（後書き）

今日はすつさりまとめてみました。

ひらがなばつかでよみにくくて、ごめんね。

『ハイム小泉』の名は、その時一度、郵政民営化についてやつた
からです。

第四話 チヤボ

ダッチ

セキセイインコ

有り ハシブトガラス

簡単なキャラクター紹介をします。チヤボのおすぎ（八歳）：中年のおっさんキャラです。嫁の尻にしかれてます。チヤボのめん子（八歳）：よく喋るおばさんキャラです。図々しいです。ダッチ（ウサギ）のぴょん吉（五歳）：人間であれば三十後半で独身です。タチが悪いです。インコ（六ヶ月）：小生意気なガキです。前部のピッチが少し憎たらしくなった感じです。ハシブトガラスの黒丸（一歳）：無責任で適当なチンピラキャラです。カラスの見田そのまんまです。

第四話 チヤボ

ダッチ

セキセイインゴ

有り ハシフトナ

俺は、谷本と一緒に部屋の掃除をすることにした。谷本にも文鳥にも好ましくない位汚かつたからだ。

三時間ほどで掃除は終わった。四五リットルのゴミ袋が一〇個は必要になった。

掃除の途中意識を無くし、文鳥の声が聞こえたりもした。意識を失う度に、谷本に小突かれたりもした。

俺は谷本に別れを告げた。

谷本が俺を呼び出した訳が気になつたが、きっと、大した用件ではないだろう。

俺に妙な力が宿つたのはいつだらうと考へると、小学校5年生が最古の記憶だ。

当時、飼育委員だつた俺は、毎日のようにウサギ二コ二コの世話をしていた。

しかし、あるとき意識を失い、つがいの二コ二コとウサギの言い争いが聞こえた気がする。

松本は、昔の記憶を思い出すことにした。

めん子：ほんつとにもう、だらしないねえアンタは！
おすぎ：うるさいなあ、お前は。

めん子：何よ。いつも寝てるか食べてるくせに！

おすぎ：俺たちは二ワトリだぞ。寝るか食べるかしかないだらう

めん子：『寝るか食べるか』！ 聞いて呆れるね！ 低血圧でカラスの鳴き声で起きるくせに！ 二ワトリつていいたいなら、朝日より早く起きて、『コケコッコー』って鳴いてみな！

おすぎ：はいはい、わかつたわかつた。

めん子：それにも、なんて意地汚いトリだよ。飼育係の人気が毎

田エサをくれるのに、なんで外に生えてる雑草なんか食べるんだい！？ あたしゃあみつともなくて情けなくなるよ！

おすぎ・仕方ないだろう。あのエサはパサパサしてて不味いんだ。めん子・つるさい！ そんなとこをカラスの黒丸に見られたらどうする氣だい！？ 『近所のいい笑い物だよ！

ぴょん吉・おおい！ 夫婦ゲンカならよそでやれ。

インコ・そうだ、そうだ。よそでやれ。

めん子・黙りな。いい年して独り身のウサギめ！

ぴょん吉・それを言うな！ 学校に金が無いから、メスウサギが来ないんだ！

めん子・そつちの方が良いね！ 每日のように交尾されたんじゃ、小学生に毒だよ！ 第一、そんなモンを見せつけられたらたまんないよ！

ぴょん吉・そつちが大分『無沙汰だからって、ハつ当たりすんな！ おすぎのダンナ、このトリになんか言つてやれ！

おすぎ・すまん。

ぴょん吉・誤つてどうすんだよ！

インコ・ひとりみ、ひとりみ・。淋しいウサギは死んじまえ・。

ぴょん吉・黙れ！ 噛みつくぞ！ コラ！

インコ・はねるだけのでっぱがいきがるな・。

ぴょん吉・このやろ……。

インコ・ひとりみでつぱ

ぴょん吉・もう我慢出来ねえ！ 噛みつく！・

黒丸・力力力。また一段と賑やかだな、この小屋は。

めん子・黒丸。アンタ何しに来たんだい！？

黒丸・冷やかしさ。

力力力。おすぎのダンナ、今日の喰いつぶりは、また一段と豪快だつたな。

おすぎ・見てたのか……。

黒丸・おう。見てたも何も、しつかり見届けさせて貰つたぜ。手始

めに、隣の学校の二ワトロ共にタレ込んでやつたぜ。
めん子：ああ、そこあぐ。もう、おしまいだ！

めん子：ああ、さいあく。もう、おしまいだ！

黒丸：カカカ。アイツ等飛び回つて喜んでたぜ。ついでに、伝書鳩とツバメ共にもタレ込んだからよ、明日にや全国区だ。

黒丸：ああ、あの白ウサギね。力力力。よ・く聞け独り身出つ歯。生まれたての仔ウサギの世話をしてたぜ。

ぴょん吉・うわあああ、もうイヤだ。俺の人生もう終わりだー

ガリガリガリガリ

めん子・おこ、ぴょん吉。オリをかじるんじゃないよ。また、前歯を折るよ。

確かあれが俺の最古の経験た

あのときは変人扱いされ、精神科に連れて行かされた覚えがある。俺はあのときを境に飼育委員の仕事をしなくなり、先生や両親に散々叱られた記憶がある。

もう、日が暮れかけてきたな。早く家に帰ろつ。

第四話 チヤボ

ダッヂ

セキセイインコ

有り ハシフト

この話は temsoさんに原案を頂きました。これを小説と言つて
良いかどうか悩み所ですが、笑つて頂けたなら嬉しいです。ご感想、
ご意見、ご要望などお待ちしております。

第五話 ハハレック ミュウたん 一 大半(前編)

申し訳有りません、ほつたからしにし過りました。

「一体何ヶ用更新してないんじや、口うー」とお叱りを受ける覚悟も出来てあります。しかも、今回は動物の山詞がやたらひりひやごちやし、これまでに無く見じくべ(醜く)なっています。

言ご訳はしません。本当に申し訳御座いません^_^(—)

第五話 フェレット ミュウたん 一才半

俺は人気のない夜道を歩いていた。既に夜も更け、冷たい夜風に吹かれる。恐らく谷本の部屋での一件が原因であろう、右膝が少し痛い。

歩くうち、昼間の公園があつた。そこの夜道同様人気が無く、ツヅジの植え込みの向こう側は暗く淀んでいる。

園内の様子を軽く一瞥し、そこを過ぎ去りつとした。すると、俺を呼び止める声がどこからか聞こえる。

「松本君……」

声は女性のものだつた。はて、この声は誰の声だろう。全くと言つていいほど聞き覚えがない。

逡巡する俺をよそに、その声は尚も俺の鼓膜を揺すぶる。

「松本君だよね？」

一度目の呼びかけで振り返る。するとそこには、一人の女性が佇んでいた。しかし、公園の街灯の逆光からか、彼女の姿は漠然とか捉えられなかつた。身長は、俺より少し低い位だろうか。それくらいしか解らない。

「ワタシの事、覚えてるよね？ ホラ、よく保健室まで付き添つてたじゃん」

誰だ。そもそも保健室つて何だ。記憶を遡るが、残念なことになかなか思い出せない。

必死に思い出す努力をしてるうち、彼女は語勢を強めて問い合わせた。

「ワタシだよ。渡部朝希

彼女、いや、渡部さんの一言は、俺の想起に止めを刺した。

「渡部さんー？ ひやあ、久しぶり！」

「思い出してくれた？」

渡部さんは満面の笑みだ。そして、それを見ている俺の顔も、自

然とほころぶ。

彼女とこうして口を利くのは、もうかれこれ十年以上久しい。彼女は俺と同じ小学校で、五年生と六年生の時のクラスメイトでもあった。当時、クラス委員長でもあった彼女は、飼育小屋での例の妙な能力で難儀する俺を、ことある事に保健室に連れて行ってくれたのだ。

しかし、渡部さんは変わった。もちろんの事だが、顔からあぢけなさが無くなり、顔つきが大人びている。どこからどう見ても『爽やか系お姉さん』である。昔の地味な面影は、一切消えて無くなっている。

（女つて……、じついう意味で怖いな……）

俺が心中でしみじみ呟いていると、渡部さんがこう切り出した
「そうだつ！ 少しウチに寄つてかない？」

少し躊躇する。しかし、この後数分に渡つてしつこく誘われると、強ち悪い気もしない。この後の用事もない俺は、『お茶くらいなら』
と思い、彼女の家を訪れる事にした。

公園から徒歩三分。とある『デザイナーズマンション』の一室が、今
の彼女の住まいだ。

「どうぞ。汚い所だけど」

一階の一室に通される。やはり女性の部屋という物は、いつの時代も男を引きつける。しかし、あくまでお茶、と自分に言い聞かせ、部屋の奥へと向かった。

リビングに行くと、あまり見たくないものを見てしまった。リビングの奥、テレビの隣に動物用のゲージがあつたのだ。

「まあ、座つて待つてて」

と、彼女に言われた。一礼してから腰を下ろすと、直ぐさま振り向いてゲージに目をやる。そこには、小さなハンモックの上で、真っ白なフェレットが腹を見せて寝息を立てていた。しかも、鼻ちょうちん付きだ。

(ふつ、助かつた……)

ほつと胸を撫で下ろす。直後、彼女は紅茶とクッキーを出し、「ねえ、これまでどうした?」と訊いてきた。

「うん、結構色々あつたよ」

そう言って紅茶を頂く。その時だつた、例の奇異な能力は、不幸にもその陰を落とす。

(しまつた……)

そう思つたとき、俺の視界はテーブルでいっぱいになつていた。

はあ～よく寝たあ～。今日もあ～なんか退屈う～。

つてえか～あの女ウザイっ！ 今朝もあ～、ミョウたんおはよーつとかつてえ～近づいて来たんだけどあ～、マジきも～。それでなくともキモイのにい～、お前何食つてんだつてくらい口、臭うしい～。足もあ～、超お臭うんだけどあ～。なんかあ～近づくなつてやつう？

なんかあ～、また男連れてきたつて奴う？ きやつきやつ～！ お前それで何人目だよつ。いくら連れてきてもあ～、無駄だつつのつ！ つうかあ～、またその男にい～、ネズミなんたらの勧誘する気だろあ～。魂胆、見え見えつてやつう～。マジ何人目？ つうかあ～、フツーに考えてえ～、『ツキ指十本』つてありえねーしい～。マジ話甘過ぎい～。まあ、アンタも前の男にそそのかされて入っちゃつたんだからあ～、マジ必死になるの当然つてヤツう～。

つてか、水替えろ！ バカあ～！ メシもマジい～しい～。自分で男にゴチになつてんじやねえ！ ウザキモつ！ マジウザつ！ それにさあ～、アンタの本職何？ キヤバ嬢だつたつけ？ 仕事でも男ダマして、副業でもダマす訳え～、かなりありえないんだけどあ～。腹黒すぎい～。ウチつてえ～、キヤバクラの常連さんにおねだりして貰つたんだろ？ 散々『カワいい』連発した割には、三日で飽きてるし。マジあり得ない！

つか、アンタ実は腹出でんだろ？ いつつもお菓子ばっか喰つてんしさあ～、体重何キロだよ？ きやつときや～ 実は七〇キロ一歩手前？ 昨日オフロでさんざん愚痴つてたの聞いてたしい～。マジ、いい気味つてやつう～。

あ～、つか、マジ脱走したいし。普通に限界ギリギリだしい～、もう耐えらんないつ！ あの女キモ過ぎ！ デブのキヤバ嬢つてあり得ないしい～。

ああ～、もう嫌つ！ つか、あいつら邪魔！ マジ ホワイトキツクう～。

眠つ。寝よ。

ゆっくりと意識が戻る。少し滲んだ視界の先には、渡部さんの怪訝な顔があつた。

「まだ治つてないの？ それ」「うん。でも、大分慣れてる」

「あ、そう」

渡部さんはいたしか納得した様子だった。

二人の空気が氣まずくなる。でも、俺はあまり氣にしていなかつた。

しばらくして、彼女が思いだしたように口を開けた。

「ねえ、松本君。人助けしない？」

「人助け？」

「そう、人助け。ちょっとね、組合員になつて欲しいんだ。でもね、お金がが掛かるのは入会の時だけで、それからは何もしなくて平気」

「ふーん」

その時、俺はもしゃと思つた。先程のフェレットの言葉が事実だとしたら……。

「まず、最初に一万円払うの。そしたら、今度は松本君が、また新しく組合員を見つけて入会させるの。その時、新しい組合員が一万円払つて、その中の五割が松本君の収入。それで、今度は松本君が

入会させた人が、また新しく組合員を作ると、今度はその人から二千円貰えるの。いい話でしょ？」

やつぱり。これは紛れもない、『マルチ商法』というヤツだ。別名『ネズミ講』。ネズミが殖えていくように組合員を増やし、その頂点の人間に金が入る、というシステムなのだが、必ず崩壊するし、何より犯罪みたいな物だ。

「でね、松本君が新しい組合員を増やせば増やすほど、松本君は儲かるの。上手く行けば、『ツキ指十本』だよ」

彼女は右手の人差し指を立て、左手の親指と人差し指でまるを作つて見せた。

引つかかるものか。あれほど熱心に家に誘つたのは、これにはめるためだつたのだ。気の毒だが、これは人助けではなく、単なる悪質商法の助長に過ぎない。んな物に引つかかる程、俺は愚鈍ではない。

「いや、やめとく。俺、今本当に金が無くてさ。そういうゆとりが無いんだ」

あえて『じめん』だの『悪い』などとは言わなかつた。別に謝ることでは無かつたからだ。むしろ、これで謝辞を述べる事は、犯罪者予備軍の人間に屈服した事を意味する。

「じゃあ、俺帰る。あと、生き物は責任持つて飼いな」

俺はそう言つて席を立つた。彼女はきょとんとした眼でこちらを見ているが、知つたことではない。

靴を履き玄関を開け外に出る。夜風はまだ冷たい。当たり前か。

「ふう。女つて、本つ当に怖いなあ～」

そう吐き捨て、俺は帰路に就いた。

第五話 ハハレット ミュウたん

一才半（後書き）

ネタ提供・愁真あさぎ様

貴重なネタのご提供。誠にありがとうございました。少し
いじくり回し過ぎました。愁真さんのネタのイメージを、甚だしく
壊してしまいましたすみません^_^(ーー)^_

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1942a/>

～ソロモン～ 動物の声が分かる男

2010年10月8日15時49分発行